新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『教育は何を評価してきたのか』

本田由紀 著｜岩波書店、2020年、253pp.

若者をめぐる教育と仕事に関する数多くの論文・著書を発表している著者は、本書において日本社会の生きづらさや窮屈さ、さらに教育や雇用の諸問題の背景にある、教育を通じた人としての「望ましさ」を求める独特のシステム構造の構築のプロセスを描き出す。それは「能力」による「垂直的序列化」、「態度」「資質」をもって教化する「水平的画一化」、そして「水平的多様化」である。

本書を読んで特に引き込まれるのは、そうした教育における序列化と画一化の歴史的変遷の分析である。その変遷はおおよそ次の様になろう。日本が近代化に向かう1872年の学制公布を皮切りに、複線的な学校系統を保ちつつも、戦時期には国家が求める「態度」と「資質」の画一化が進行した。戦後には日本国憲法や教育基本法により「能力」に応じた教育機会の提供が始まるが、教育制度は単線的な学校系統へと移行し、高度経済成長期以降は高校全入運動、普通科増設、学力テスト実施の高まりの中で知的習得度としての「学力」による垂直的序列化が進む（日本型メリトクラシー）。つづく1980年代には「関心・意欲・態度」をも含めた「新学力観」が普及し、90年代以降は「生きる力」や「人間力」と称する「能力」が軸となる（ハイパー・メリトクラシー）。2000年代に入っては「道徳」による「ハイパー教化」が展開している。

こうした変遷から、求められる「能力」は肥大化し、捉えどころの欠ける「能力」に人々は否応なく対応を迫られてきたようだ。歴史的に特異な「能力」が盤石化してきた日本社会をいかに変革できるのか。終章での著者の解決試案を含めて、社会再生を考える際の必読の一冊となろう。

（評／『彦根論叢』編集委員／山田和代）

『働く人のための感情資本論―パワハラ・メンタルヘルス・ライフハックの社会学』

山田陽子 著｜青土社、2019年、231pp.

本書は「感情」を切り口として、社会経済事象を読み解く。そこで扱うのはメンタルヘルス、過労自殺、パワーハラスメント、ライフハック、ワークライフバランスなどで、職場や生活での主要で深刻な課題・テーマである。これらの考察の前提になっているのが、「感情」を資本としてとらえることと、その管理の重要性と現代性である。

とかく対人サービスの職場では、感情の管理が労働者には求められる。本書で言及されるように、産業社会での肉体的生産労働とは異なり、例えば対人サービス業やオフィスワークでの上司・同僚への、また顧客への「感情」の発露の仕方やそのコントロールの良し悪しは、働く者に対する評価を左右する。部分的であれ全面的であれ、そうした感情のコードのもとで私たちは働き、生活をしている。

他方で、「時は金なり、感情も金なり」（第6章のタイトル）は感情資本や感情管理に興味をさそう絶妙な表現である。これまで職場や生活での時間管理については数多くの研究蓄積がなされてきたものの、感情管理に関してはさらなる研究が待たれていよう。効率性や生産性向上の要求が高まる現在、時間のやりくりのみでなく、機械ではない人間であればなおのこと感情のやりくりが欠かせないからだ。

「感情」に着目し、身近な事象から今日の日本社会を描き出す本書は、その姿の危うさをも読み解いている。読後には、感情のやりくりに試行錯誤しながら、私たちはなんと日常を積み重ねているのかと気づかされる。ぜひ一読をお薦めする。

（評／『彦根論叢』編集委員／山田和代）